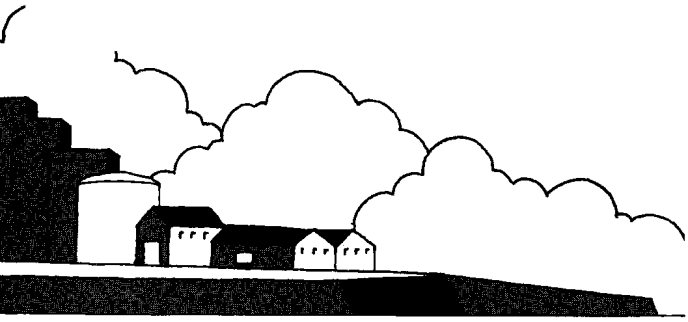
北杜夫全集——8

高みの見物
第三惑星ホラ株式会社

北杜夫全集—8



新潮社版

高(たか)みの見物(けんぶつ)・第三惑星(だいさんわくせい)ホラ株式会社(かぶしきがいしゃ)

〈北杜夫全集 8〉

一九七七年七月二〇日　印刷
一九七七年七月二五日　発行

定価一〇〇〇円

著者　北杜夫(きたもりお)

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社

東京都新宿区矢来町七一（〒一六二）
電話　業務部　東京（〇三）二六六－五一一一
編集部　東京（〇三）二六六－五四一一
振替　東京四－八〇八番

印刷　株式会社　光邦
製本　大口製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Morio Kita 1977. Printed in Japan

目次

高みの見物 5
少年と狼 221
彼は新しい日記帳を抱いて泣く 237
処女 245
活動写真 265
第三惑星ホラ株式会社 281
朝の光 297
宵 301
うつろの中 305
推奨株 309
月世界征服 313

陸　魚　317
雪は生きている　321
ヒマラヤのヒョウタンツギ　325
赤いオバケと白いオバケ　329
みつばち　ぴい　335
ローノとやしがに　341
さっちゃんとパパとママ　347
初出と収録　352

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

高みの見物・第三惑星ホラ株式会社

高みの見物

目玉医者

揺れている。ゆったりと揺れている。右にゆれ、左にゆれ、それから上下に揺れている。

それがもう二カ月の余もつづいている。

といって、なんの不思議もないことなのだ。ここは船の中だからである。水産庁の漁業調査船「大洋丸」の船中なのだ。

「大洋丸」なんぞというと、いかにも堂々とした大船を連想させるが、実は六百トンしかない小船にすぎない。「小洋丸」とか、あるいは「水タマリ丸」とでも改称したほうがいいかもしれない。

従って、その船室も、ごく小さくて狭いのもやむを得ないといわねばならぬ。ベッドは二段の寝棚になっていて、少し背の高い人は、いくらか足をちぢめないと寝られない。

船窓の下に細くソファーが作られている。ソファーというと聞えがよいが、実は低い腰かけにすぎぬ。床の面積は、人間が三人も並べばギッシリつまってしまうくらいのものだ。

壁に、一応机がある。これもごく狭い。その机にむかって、一人の男がひどく真剣になにやら数えている。

「ひい、ふう、みい、よう、いつ、むう……」

机の上にはピースの罐が開けられていて、そのそばに何十本かのタバコが取りだされている。この男は、そのタバコの本数をかぞえているのだ。

「十五、十六、十七、十八……」

男はよれよれのポロシャツを着ている。ズボンもこれまたよれよれの半ズボンだ。もっとも、船はいま南海を走っているのだから、この一見だらしのない恰好もなかばやむを得ない。

背はむしろ低いほうだ。ずんぐりとして足が短く、スタイルこそよくはないが、ころぶのは上手そうだ。

度の強い近眼鏡をかけている。頭はボサボサしている。額は広いが、頬からアゴのほうにかけて、次第に尻すぼみになっていて、三角形のオムスビを逆さにしたような恰好をしている。年は三十を幾つか越したくらいか。

要するにあまり美男子ではない。否、断じて美男子ではない。

「三十、三十一、三十二……」

と、彼はなおも一生懸命になって、タバコの数をかぞえている。なんでこんなにムキになって数えているのか。

そのとき、ドアがノックされた。そして、返事を待たずに、ドアがあけられた。

その前から、この部屋はエンジンの音でかなりうるさかったのだが、いったんドアがあけられたとなると、エンジン・ルームがすぐ前にあるらしく、ドッとけたたましい噪音がとびこんでくる。

その音響と共に部屋にとびこんできたのは、作業服姿の船員であった。いきなり大きな声で言った。

「ドクター、腹具合がわるいんで」

この会話でもわかるとおり、タバコの数をかぞえている眼鏡の男は、この船の船医なのである。ほかのときこそ役目がないが、病人がでたとなれば、診察し治療する任務をもつ船医なのである。

それなのに、このドクターは一向に動じない。

「なに、腹具合?」と彼はごく簡単に言ってのけた。「そんなら胃散、隣りの部屋!」

「隣りの部屋?」

と、その船員は問い返した。

「隣りで診て頂けるんで?」

「そうじゃない」

と、ドクターは椅子にデンと腰をおろしたまま、

「隣りの治療室に戸棚がある。その中に胃散のびんがある。君、自分でそれを持っていって、飲んでみたまえ」

「じゃあ、診察は?」

「まあ、いいだろう。胃散をのめば大丈夫さ」

「胃散なんかでいいんで? もっと高級な薬はないんですか?」

「ゼイタクを言うな、まず胃散をのんでみて、それでも効かなかったら、べつの薬をあげよう」

船員は、これはダメだというふうに肩をすくめた。それから、あきらめたらしく隣りの治療室へ行ってゴソゴソしていたが、やがて手に薬の袋をもってでてきて、

「じゃ、とにかくのんでみます」

と、ふくれたように言い、部屋を出て行った。

あとに残ったドクターは、

「待てよ、三十三、だったかな? それとも三十四だったかな。とんだ邪魔がはいってわからなくなってしもうた。畜生め、まあいい、はじめから数え直すか」

そして、またもや、

「ひい、ふう、みい」とはじめだした。

これは、有体にいってひどい態度ではなかろうか。いくらなんでも無責任すぎはしまいか。

といって、わたし――この「わたし」が何者であるかは、いずれあとになってゆっくりと説明しようと思う――は、こういう光景をこれまでにさんざ見てきているから、べつだん事改めておどろく気にもなれない。

もともと、わたしはこの大洋丸に、ときどきの陸上生活をのぞいて、もう二年あまり乗っている。そして、主にこの船医の居室に根城をかまえている。従って、これまでにわたしは何人もの船医の人となり、その日常、その診察ぶりを見てきているわけだ。

大洋丸は、短くて二ヵ月、長くて半年という具合に、世界各地の海で漁業調査をくりかえしている。そのたんびに船医が変る。日本内地に帰港している期間も長いので、航海のたびごとに、新しく船医をやとうのだ。

しかし、船医になろうという医者はそうはいない。おまけに六百トンの船だ。船医として好適なのはむろん外科医だが、大洋丸には今まで一ぺんも外科医が乗ったことがない。耳鼻科、産婦人科、精神科などが、これまでわたしの知っている船医であった。そして、今いるこのドクターは、眼科のお医者なのである。

それにしたって、今度の眼科医ほどひどいナマケモノの医者をわたしは見たことがない。

「二十、二十一、二十二……」

と、彼はタバコの本数をかぞえている。

そのとき、また新しい患者がやってきた。油に汚れた作業衣からみて、機関部員らしい。

「ドクター、風邪ひいたんです」

「風邪?」と、うわの空でわがドクターは言った。「二十三、今度は忘れないぞ。なんだ、君、風邪だって?」

ドクターは、ようやくこちらに向き直ると、じろりと相手を見た。

「どうして風邪だとわかるんだね?」

「それは」と、機関部員は言った。「喉も痛いですしね。鏡で見たら赤くなってるんです。水っぱなも出てね。それから、熱もありまさあ」

「なるほど」

と、ナマケモノの眼科医は言った。

「しかし、風邪は万病の元という言葉がある。風邪だと思っていると、それが脳膜炎の初まりだったりすることもある」

相手はギョッとしたらしい。しかし、すぐにヘラヘラ笑って、

「御冗談を、そんなら、ちょっくら診察して貰いますかねえ」

「まあ待て。ちょっと舌を見せなさい。ああ、なるほど、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

これは脳膜炎じゃない」
「そんなカンタンなことでわかりますか?」
「むろんわかる。これは単なる風邪だ。ええと、二十三、だったかな?」
「あっしは二十六ですよ」
「いや、年を聞いてるんじゃない。こちらのことだ。とにかく、これは風邪だな。アスピリンをのみたまえ。隣りの部屋にあるから、自分で行って、持って行きたまえ」
患者の顔には、争いがたい不信の色が浮かびあがった。
「アスピリンですかあ」
と、口をとがらして、
「ドクターは、風邪には全部アスピリンしか出さないって噂だね」
「そうだよ」
「それから、胃腸がわるいっていうと、全部胃散だって」
「そうさ」
「しかし、この船にはもっと高価な新薬だってどっさり積んである筈ですぜ」
「ばかな。新薬をありがたがるというのがそもそも間違いなのだ。治らんときには、ぼくはちゃんとそれなりの薬をあげる」
「そんなものですかねえ」
「そんなもんだよ」
「そいじゃ、やっぱりアスピリンで?」
「くどいねえ。アスピリンで大丈夫だよ。ぼくはいま忙しいんだから」
機関部員はあきらめたらしく、それでも多少うらめしげに、隣室の治療室へ消えた。
あとに残ったドクターは、
「二十四、二十五……」
とタバコを数えだす。
すると、機関部員がふたたび治療室から現われて、なんだか嬉しげに、
「ドクター、〝強力ナオール〟という薬がありましたが、こっちの方が効きそうだから、こっちを頂いて行きますぜ」
「強力ナオール」
と、ドクターは呟いた。
「はて、そんな薬があったかしらん。まあ、いい。なんでも持って行きたまえ」
と、極めて無責任な態度である。
それから、機関部員が行ってしまうと、さらにこんなハレンチな言葉を呟いた。
「こう丁寧に診察していては身がもたん。このタバコにし

ても、さっきから何遍数えなおしたか、わかりゃしない」
そして彼は、さも腹立たしげに、眼鏡を光らせ机の上にころがっているピースを、ひときわ猛烈な速度で数えだした。
「三十、三十一、三十二、三十三……」
ドクターは、今度こそ邪魔されずに、最後までタバコの本数をかぞえあげた。
「四十八、四十九、五十と、やはり五十か」
彼はなんだかガッカリしてしまったように呟いた。
「やっぱり五十か。ううむ」
正直のところ、このドクターは閑すぎるのである。大体病人がきても、診察もせずに、「胃散！」「アスピリン！」で追いはらってしまうのでは、結局やることがなくって、ついにはやらずともいいことをやりだすのも無理からぬことであろう。
先日、彼はピースの新しい罐を開けたとき、ふと一抹の疑惑を覚えた。それは五十本入りの罐である。しかし、たまには、四十九本だったり、五十一本だったりすることもあるのではないか。
よし、ひとつ、それを捜しだしてやろう。そして四十九本のピース罐を見つけたら、専売公社に投書してやろう。
大体こんな考えは、よほど閑で退屈していないと浮んでくるものではない。しかし、船の中では、まして半分余計者の船医の身では、その閑と退屈がたっぷりあるのである。それ以来ドクターは、新しい罐を開けるたびに、せっせとその本数をかぞえる次第になったのだ。
「こいつも五十本か」
彼は、のびかけた頤ひげをなでながら、ブツブツいう。
「してみると、結局みんな正確に五十本なのかもしれないぞ。もっとも、機械でつめるんだろうからなあ。機械では正確なわけだ。あれだけの苦労をして、どうやら無駄骨を折ったらしいぞ」
それから彼は、机の上に取りだしたタバコを罐に収めはじめた。ところが、もともとギッシリつまっていたタバコであるから、いったん取りだしてしまうと、なかなか元のように収まらない。
「おかしいぞ。一本余ってしまうぞ。ううむ、これはよほど素晴しい技術を用いて入れてあったにちがいない。さすが専売公社だ」
つまらないことに感心して、しきりと頤を撫でている。よほどの超閑人とみえる。
「もっとも専売というからには、一手に独占して暴利を得ているにちがいない。正確に見事に五十本入れるくらいのことなんか、考えてみれば当然だ」

こんなことは、なにも考えてみなくても、当然と思える。そんなふうに、ドクターが頤をなでながら、およそ無益な考えにふけっていると、またもやドアに乱暴なノックがあって、一人の男がはいってきた。

さっきまでのが平船員なら、今度のは士官である。チーフ・オフィサー（主席航海士）である。もっとも航海中だから、やはり作業衣すがたで、とりわけキリリとしているわけではない。

「ドクター、お忙しいですか」

「なにね」と、ナマケモノのドクターは平然として厚かましい言葉を吐いた。「いささか忙しかったですがね。いま、ようやく一段落つこうかというところです」

「なにかお仕事でも」

「なに、ちょっとした学問上の疑惑につき当ったもんですからね。いろいろと悩んでいたわけです」

と、ドクターはあくまで厚顔である。

「どうもお邪魔するようで申し訳ないですが」

と、チーフ・オフィサーは部屋の隅っこにあった丸椅子を引き寄せて、腰をおろした。

「なに、かまわんです。ぼくは邪魔されるのには慣れていますから。ところで、チーフ・オフィサー、このピースの罐ですがね」

ドクターは、その濃紺の丸い罐を手でもてあそび、

「これには一体タバコが何本はいっていると思います?」

「というのは、新しい奴……、つまり、この罐が何本入りかってことですか?」

「さよう」

「だったら、五十本に決まってるじゃないですか」

「本当にそう思いますか。どれもこれもみんな五十本だと?」

「そりゃそうでしょう。だって、そもそも五十本入りの罐じゃありませんか」

「なるほど」

ドクターは、たいそう感じ入ったようにうなずき独り言のように呟いた。

「そんなふうに単純に考えたほうが利口か知らん。しかし、それでは真理の探究というわけにはいかんな」

「ピースがどうかしましたか?」

「いや、なんでもないです。ところで、なにか御用件でも」

「それがですねえ、ドクター、どうも言いにくいことなんですが」

と、チーフ・オフィサーはちょっと照れたように笑って、

「どうも航海も長くなると、いろいろと病人もあって、ド

クターとしても大変でしょうがね」
「いや、それほどでも」
「ところで、甚だ申しにくいんですが、その診察についてのことですがね」
「ほほう、なんです？」
「そう改まられると困るが、つまり、ドクターの診察は、あんまりカンタンすぎると、こういう意見もあるわけです」
「……」
「カンタンというより、何も診ちゃあくれないと、こう言ってる者もいます」
「……」
「で、こう申しちゃあなんだが、もうちっと丁寧に診察してやるわけにはいかないですかねえ、ドクター？」
ドクターはしばし沈黙した。内心むっとしたのかもしれない、或いは困惑したのかもしれない、と思われたが、わがドクターはなかなかこのくらいのことで恐れ入るような男ではなかった。
「ぼくの診察がカンタン、そりゃそれでいい。ところでこの船では今まで死人が何人出ました？　いや、ぼくが船医として乗りこんでからですがね」
「死人？　いやなことを言わないでくださいよ。そんな者がいるわけないじゃないですか」
「それなら重病人で半死半生の者は？　ペストとコレラは？　この船は病人だらけで幽霊船のようになってますか？」
「とんでもない。どうも大げさですな」
「べつに幽霊船でもないとすると、病人はちゃんと治っているわけでしょう？　そうすると、ぼくの治療について、とやかくいわれる道理はないですなあ」
「そういう意味じゃないですよ」
と、チーフ・オフィサーは慌てたように手をふった。
「なにもドクターの治療法がわるいというんじゃないですよ。ただ、もっと心理的な問題ですよ。なにせこういう大洋のまっただ中ですから、船員てものは大胆なようでいて、どっか心細いんですよ。それが身体の具合がわるくなって、ドクターに診て貰う段になって、聴診器ひとつ当てられないということが心細いんですよ。どうです、ドクター、せめて聴診器をもう少し使いなすっちゃあ。聴診器にだって、カビが生えるかもしれませんしね」
終りのところは、少々皮肉っぽく言った。だが、ドクターは一向平気である。
「聴診器になんぞいくらカビが生えても、ぼくは困らんですよ」

「そりゃまたどういうわけです?」
「大体ぼくは聴診器を使わないからね。ぼくはそもそも眼科医ですからね」
「そりゃ知ってますが、少しは使うでしょう?」
「ところがぼくは使わないんです。たとえ使ったとしても、……たとえばここの胸のところに聴診器を当てる。すると心臓の音がする。また肺臓の呼吸音を聞いたとしても、はっきり言っちまえば、ぼくにはなんにもわからんです」
「なんにもわからない? そんなことないでしょう」
「いや、わからんです。断じてわからないんです。ぼくは目のことしかわからん」
と、ドクターは、まるで威張っているかのように、いやにはっきりと断言した。
「そりゃひどいなあ」
と、チーフ・オフィサーも、いささかあきれたような声を出した。
「しかしドクター、そもそもお医者さんてものは、医学百般を一応全部習うわけでしょうが」
「そりゃ習います」
「それなら、専門外のことだって少しはおわかりと思いますが」
「インターン生なんて一応各科をみんな浅く知ってるわけですよ。ところが、ぼくのように大学の医局にはいって何年も経つと、ほかの科のことなんかあらかた忘れてしまうものです」
「だって、今まで本船には、精神科だの耳鼻科だのの医者が乗っていたが、一応みんな専門外の診察もちゃんとやってましたよ」
「それは……ぼくが思うに、彼らはヤブ医者だからです。専門家として一家をなしてないわけですな。ぼくくらいの眼科の専門家になると、ほかのことは、もうニキビひとつ治す自信がなくなるものです」
「専門家はけっこうだが、それじゃ困りますなあ。もし盲腸の患者なんか出たらどうします?」
「まあ船に全速力を出して貰って、一番近い港に急行して貰うより仕様がありませんね」
「ドクターはそうカンタンに言いますがね。船の予定を変えるということは、これは大変なことなんですよ。港に一日入港するんだって、莫大な費用がかかるんですぜ」
「そんなこと言っても仕様がない。ぼくは眼科医、それも腕ききの専門家なんだから。それを承知でやとった役所がわるいってことですな。たとえばここに、白内障(そこひ)でも網膜剝離(はくり)の患者でも連れてきてごらんなさい。立ちどころに手術してみせるから。目玉の五つや十はえぐりだしてみせる

から」
「いや、わかりました、わかりました」
と、チーフ・オフィサーはすっかりあきれたふうに、困惑してもう一度手をふった。
「ドクターが腕ききの専門家ということはよくわかりましたよ。目玉がわるくなった者がでたら、どうか存分にえぐりだしてください。しかし、しかしですよ、ドクター。やっぱり船では目の病気はごく一部で、ほかの病人だってなんとかして貰わなくちゃなりませんからね。どうでしょう、ドクターがほかの病気がわからないというのがもし本当としても、一応形だけ聴診器を当ててやるわけにいかんでしょうかねえ」
「形だけ?」
「ええ、形だけでいいんで、それで船員たちはけっこう安心しますから」
「真の専門家はそんな真似はしないね。ぼくはいやですよ」
「そんなこと言わないで。医者というのは人助けをする者でしょう?」
「ぼくが聴診器を当てたって、べつに人助けにならんですよ」
「まあまあ、ただ真似事をするんですよ。そして、ううむ、これは大丈夫だ、とこう一言いうんですよ。それだけで船員なんてものは安心して、病気だってよくなっちまいます。そのあとで、アスピリンなり胃散なりをやればいいんですよ。心理療法ってものはバカにならんのでしょう」
「それはたしかにそうだが、けれど、ぼくはそういう真似をするのがきらいな性分でしてね」
「やってくださいよ。船なんてものは狭いもので、あとは波のほかなんにもないんですからね」
波のほか何もないという説には、わたしとしても同感である。近ごろは地球は狭くなったとよく言われるが、長い航海をして、毎日いやになるほど波頭とかすかに丸い水平線ばかり見ていると、とてもそんなことは考えられない。
いま船は、ハワイ諸島の北東四百カイリほどの海上にいる。漁業調査のための航海だから、航路からも離れ、行きかう他の船の影だに見えない。
海はどぎつい群青にかがやき、船首から舷側にくだける波は、無数のこまかい泡となって、周囲の色濃い海へ拡散してゆく。その眺めはたしかに美しいといってよい。しかし、くる日もくる日も同じ光景を眺めていれば、誰だってどんな心理状態になるか容易に想像できるだろう。
飽き飽きしてくるのだ。もう、いやになるのだ。どうしようもなくなるのだ。ある者は壁に頭をぶつけたくなり、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com